

歴史は形を変えて繰り返す！歴史(戦略)に学ぶ企業経営

大正バブルと崩壊… 「バブル」と「崩壊」は繰り返す！ 中小企業の生きる道 (三角経営の勧め)

1 バブルと崩壊はいつか止まる(バブル期と崩壊期は未来が決める)。

人はバブルと崩壊に気が付かない(過去のバブルとは異なった形や姿を変えて来る)。バブル崩壊に気づくのは遅れる。バブルの最中にバブルを認識するのも難しいが、バブル崩壊に気づくのも遅れやすい。いずれの場合も、決定的に景気が悪化して、初めて、バブル崩壊が起こったことが理解できるのである。1989(平成元)年12月18日に、日本株の史上最高値(38,915円87銭)であったが、その後、株価急落の中で、日銀は公定歩合を3度引き上げた。金融緩和に踏み切ったのは、1991年7月のことであった。

歴史上、バブルは何度も繰り返して来ましたが、平成バブル以降でも、米国のITバブル、同じく米国の不動産バブル(リーマンショックの源がありました)。ということは、遠からずバブルが起きる可能性はあるわけです。

バブル期間や崩壊期間は未来が決めるものであり、その当時の人たちが(当事者)はいつからバブルでいつから崩壊とはわからない。未来の人たちが「〇年〇月〇日」がバブル期とか崩壊期であったと認識する。

2 大正バブル(第一次世界大戦景気)と崩壊

第一次世界大戦の影響により、その参戦国でありながら本土が大戦圏外にあった日本の商品輸出が急増したため発生した空前の好景気(ブーム)。1915年(大正4年)～1920年(大正9年)に日本の株・土地・商品(綿糸・生糸・米等)の上昇(大戦景気、大正バブル)。連合国側に軍需品を提供したほか、ヨーロッパが戦場に巻き込まれている間に世界市場に打って出た。また、ヨーロッパから機械や化学製品が入ってこなくなったため、自前の工業が育つことになった。

1920年代後半にアメリカで、

3 平成バブルと崩壊
第一次世界大戦のためヨーロッパから流入した資金により株投資ブームとなる。暗黒の木曜日の株価大暴落(1929年)でバブルは崩壊し、世界恐慌の引き金となった。

4 三角経営の勧め
バブル景気は1986(昭和61)年12月～1991(平成3)年2月までの51か月間に、日本で起こった資産価格(株と土地)の異常な上昇と好景気。バブル崩壊期間(平成不況(第一次平成不況)や複合不況とも呼ばれる)は、1991(平成3)年3月から1993(平成5)年10月までの景気後退期を指す。

景気が良くなると、経営資源(人・モノ・金・情報・時間等)を一つの事業に集中させることが多くなる。製造業ならば、1事業に設備投資をして拡大路線に走る。一時的に成長は高くなるが、崩壊すると痛手は大きい。結果論では「バブルに乗るな」というのが、心理面では乗りたくなるのが実態であろう。また、崩壊(景気後退)時での撤退は特に難しく判断

に迷う。

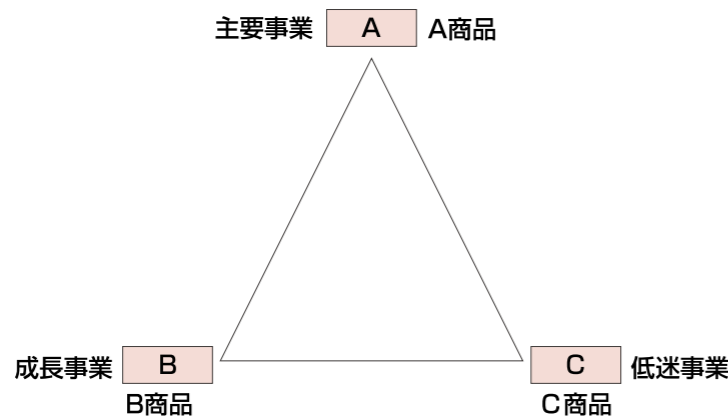
3つの選択肢

(1)バブルの「追い風」「勝ち馬」に乗ることも経営、乗らないことも経営だが、乗ると引き際は難しい。経営

資源をバブル事業(商品)にすべて投入することは大きなリスクになり得る。3つに分散することがリスク回避につながる。

(2)3つの事業(商品)展開

- ①1つに絞ると環境や顧客ニーズの変化に対応できないことも起こり得る。
- ②主要事業(商品)であるAが好調な時にBとCを育てる
- ③主要事業(商品)であるAが低迷したら、BとC事業(商品)がカバーする。
- ④バブルに乗ったB事業(商品)が崩壊したら、AとCで補うことで最少の被害で済む



3つの事業(商品)	割合	経営の見方
A: 主事業に特化(本業)・商品	60	本業を忘れるな!本業のみに溺れるな!本業は常に洗練せよ!
B: 追い風に乗った事業・商品	20	バブルに乗ることも経営、乗らないことも経営
C: 低迷(見直し)事業・商品	20	どんな事業(商品)でも賞味期限はある。捨てることも経営

歴史は、今を経営する者がより良い事業を展開するために、先人が遺してくれた経営の鑑(かたど)りでもあります。

* 史実は諸説があります。本文とは異なる説もありますのでご了承ください。
* 参考文献: 大正時代(徳間書店)「バブルは10年に一度やってくる(東洋経済新報社)」

中小企業診断士・
社会保険労務士・販売士
大野実雄 氏
●プロフィール(オオノ ジツオ)
メーカー、経営コンサルティング
ファームを経てオオノ経営労務事
務所開設。「変化には変化でしか
対応できない」を企業支援の基本
としている。著書に「売れるように
売れば必ず売れる」「働き方・生き方
こころの軸」「勝つ企業」等がある。

